

観音

平成4年7月

第17号
年2回発行
発集発行

広島県安芸郡府中町
茂陰2丁目2-8-10
真言宗 正観寺

小出真行



この鎖、川崎先達 撮影

悪いことをしなければ苦しむことなく

善いことをすれば樂を得る

秘蔵宝鑰

「精進料理」

肉っ気のない野菜だけの料理のことを「精進料理」といいます。ですから、なんだか「精進」は「菜食主義」の別名みたいに感じますが、もともとはそんな意味ではありません。「精進」というのは「勇氣」とか「勇者の心ばえ」を原義とし、「勇猛心」とも漢訳されますことから、仏教では、「決然として一心不乱に心道にはげむこと」を意味します。

もともと、お坊さんと在俗の信者さんが特定の日を集まって、仏教の理解を深め、信心のほどを確認しあう習慣がありまして、その日は「精進日」と呼ばれていました。

この日は、不殺生戒をはじめとする重要な戒律をきちんと守る日でもあったため、出される料理に肉のたぐいは一切入りませんでした。従いまして精進日の料理は菜食料理、そこから、精進料理は菜食料理の別名になったということです。

第一の目的地である四国霊場の香園寺に到着、この香園寺には、安産、子授けの御利益が得られる「子安大師」は、有名で、本堂には、可愛らしい子供の写真がところせましと飾られ、全国津々浦々より訪れる方が絶えないそうです。ここで簡単にお勤めを済ませ、すぐその足で、第二の目的地、石鎚本社にての御神像拝載、でも、別の団体が先に本殿に入っているため待つこと一時間足らず、この間、前神寺へ参拝する方、くつろいで神礼授与所で石鎚山のビデオを観る方など……。や々と御神像の拝載、

先達さんの協力を得て各自に御神像の御徳をいただくべくお加持を次々に（この御神像は、本社・成就社・頂上社の順にずっしり重くなっています。）していきますと、頭から汗が吹き出ますが、これは心地よい汗です。

拝載が終ると石鎚温泉で昼食をとり、第三の目的地極楽寺へ向かいました。極楽寺では運よく待ち時間もなくスムーズに石鎚大権現の御神像を開帳していただき、内護摩にて各家の祈願、そして住職の有難い講話（ここの住職の講話は好評で、以前聞いた話のなかでいっか花開く等は特に印象に残っています）を聞き、身も心もリフレッシュした気持で極楽寺をあとにしました。

登山口より傾斜をはうようにロープ・ウェーで中復まで上りますが、昔はここを徒歩で登ったそうですので大変さが想像できません。ロープウェーを降り前神寺の奥の院にお参りをし、歩くこと二十分位で本日の最終目的地、成就社に到着。玉屋旅館で一息つき、拜殿で本社より一回り大きな御神像を拝載させていただき、再度、汗を拭き拭きお加持をし、夕食、入浴を済ませ明日は早いので床につきましたが、どの方も興奮しているせいかなかなか寝つけず、やっとうとうとしたかと思うと突然

「もう四時だ！」

の声
あわてて、眠い目をこすりこすり時計に目をやると、なんと十二時二十分、どうやら長針と短針の見間違いらしく爆笑、そのお陰かりラックスして熟睡ができた様に思えます。

朝四時には、ほとんどの人がごそごそ起きて身支度をし（いっも朝は、風の「ゴー」という音で目を覚ましますが、天気はいたって穏やかなので一安心）朝食をすませ、五時の開門が近づくとつれ多くの団体がいまやおそしと順番まち。

午前五時、鐘の音とともに開門、頂上に向かう長い帯が薄暗い中をゆっくり進み出

し、途中、遙拝所（鳥居）でのとりまとめを、難波、橋本先達にお願いし、元気よく曲がりくねった急勾配の道を

「ナンマイダー」「ナンマイダー」と唱えながら、中間点の茶屋を目指し、心蔵破りの坂を登ります。今年は久し振りの御来光を期待しましたが、あいにくお目にかかることはできませんでした。なにぶん私が帰広して十二回目の参拝の中で御来光に出会えたのはたったの二回だけ、やはり梅雨時期の大祭ですので、雨はつきものの感じがします。晴天、雨天の時は発汗作用で体力を消耗しますので、曇天で霧雨状態が登りやすい感じがします。試しの鎖（上り四十八メートル、下り十九メートル）の行場の前を通り一時間程で茶屋に到着、少し休憩をし、再び登りはじめると、待望の一の鎖（三十三メートル）が見えはじめ、急に足取りも軽くなった気持になりますのは不思議です。二の鎖（六十五メートル）。三の鎖（六十八メートル）を登り切るとそこは展望が開けた頂上社となります。鎖を登るには少々足に自信がないとおすすめしかねます。といいますが、膝にかなりの力を用し、下山の時までにダメージを受けるからです。したがって少し年配の方は鎖のない登拝道を登ります。

約二時間少々で頂上社に到着し、まずは山頂にて御神像を拝載し雲海を見下しながら胸一杯新鮮な空気を吹い込みます。その後、格別な「あめ湯」で喉をうるおし、一息つき、霊水（御神水）をリュックに詰め下山の準備をしますが、数量を多くすると肩にずっしり重くのしかかります。

「よっこらしょ。」

と気合いをいれリュックを背負い一步一步用心しながら下っていきますが、やはり徐々に背中が重く感じますので登りよりも下りの方が大変です。「行きはよいよい、帰りはこわい」の歌詞ではありませんが、登りに力を使い果たすと、膝がガクガクわらって力がなかなかはいりません。おそらく皆様のなかにはその様な経験を味わった方も少なくないでしょうね。

快調に下りはじめ、出発点の成就社に目標の十時までには余裕をもって全員無事到着しました。あとは、少し歩きロープウェイで登山口に降りるだけ、その頃には天候もよくなり、少し蒸し暑さを感じる様になりましたが、一つの目的を達成した皆さんの顔はどこことなく輝いて見えます。

ところで、この石鎚山での登り下りは、「お上りさん」「お下りさん」と掛け声を出しあって行き交いをしますが、下山の時に「お上りさん」と言う言葉はなかなかい

いもので思わず笑みがこぼれてしまいますよね。

途中、石鎚温泉で昼食をとり、風呂で汗を流し午後七時前には帰広し、二日間の石鎚山参拝も無事成就し、幕を閉じました。この間、労をとっていただいた。難波・橋本・木村・田村・大西・川崎諸先達には本当にお世話になり感謝に堪えません。厚く御礼申し上げます。

「呼び方はいろいろ？」

インドにおいて、仏教やジャイナ教の修行者が居住しています場所を「ヴィハラー」と呼び、漢訳仏典によりますと、この「ヴィハラー」は、**寺舎**・**僧坊**と訳してあります。この「ヴィハラー」の中に、それぞれの修行者が生活する小さな部屋「ラヤナ」があります。現在、インドのナランダには、その者、玄奘三蔵が中国からシルクロードを通り、ここにきて学んだといわれていますナランダ大学の跡に、一坪くらいの広さの「ラヤナ」がずらっと並んでいるそうです。この「ラヤナ」ですぐ漢訳仏典によりますと、**房舎**・**房**と訳され、いわば刑務所の独房に似たものだとお考え下さい。但し、入口や窓には鉄格子は付いていませんのでお間違いのない様に……。

わが国では、大きな寺院にあって僧侶が起居する室を**房**と呼び、その**房**の主を**房主**（ぼうず）と呼んでいました

が、いつの頃からか**房**が**坊**にとりかえられ**房主**が**坊主**と呼ばれるようになりました。でも最初は、小さな部屋であります**房**よりも、もっと大きな場所に居住しています僧を**坊主**と呼んでいたらしいのですから、**坊主**という呼び方は起源的に申しますと決して軽蔑ではありません。しかし現在では**坊主**と呼ばば完全に蔑称として使われているようです。

お坊さん・**お寺さん**・**住職さん**といった呼び方が一般的で親しみをおぼえる呼び方ですが、**真言宗**・**浄土宗**・**浄土真宗**では**院主**・**院家**といった呼び方もよく使われます。この**院**とは**別院**の意で、大きなお寺の自分専用の別院を持ち、そこに居住していることを意味しますし、禅宗においては、住職の居住する場所を**方丈**といいますので、**方丈さん**といった呼称が使われています。そのほか一山の主でありますところから**山主さん**といった呼称も使われていますが、特に位の高い僧侶ともなると（管長クラスの高徳な僧）**猊下**を用います。この**猊**とは**獅子**の意があり、仏のすわる座を獅子座と呼びましたところから高僧がすわる座を**猊座**と名付け、**猊下**という呼び方ができたわけです。また、法然上人のように**お上人さま**といった敬称もあります。あまり若い僧侶に対しては適さず、年輩の僧侶に対してのみ使われる敬称です。

皆さんは、どうお呼びしますか？